

皮膚科

a. 体制

2022年度は5名体制で診療を行った。詳細は以下の如くである。

主任部長：

吉川義顕（京大 1991年卒、 2017年4月から当院勤務）

副部長：

古賀玲子（岐阜大 2003年卒、 2010年1月から当院勤務）

医員：

山上優奈（大阪医大 2010年卒、 2017年1月から当院勤務）

臼居志保（香川大 2017年卒、 2022年3月から当院勤務）

レジデント：

千田晃嘉（京大 2019年卒、 2021年4月から当院勤務）

衣斐菜々（琉球大 2019年卒、 2021年4月から2022年2月末まで当院勤務）

b. 診療実績

外来の診療体制については、土曜日が休診日になったこと、木曜日の午後に予約診療枠を隔週で設けたことが前年度との違いであり、その他は前年度と同様に、月曜日から金曜日までは午前3診、午後2診とし、水曜日の午後には外来手術枠を設け診療している。

診療方針としては、原則として主たる疾患群に関してはガイドラインに準拠した診療を基本とし、いわゆるEBMに根拠をおいた標準化された治療を行うよう努めている。

外来診療における傾向としては、コロナ禍以前（2019年度）と比較し、それ以降（2020年度～2022年度）では延外来患者数、初診患者数は減少し、紹介患者数のみ昨年度から回復の兆しが見られる。入院診療においても、1日あたりの在院患者数、新入院患者数ともに減少している。また、2020年度、2021年度との比較においても、今年度（2022年度）は、ほぼすべての実績において減少傾向である（表：2019年度～2021年度との比較）。

具体的な診療内容としては、まず近年の皮膚科診療における大きな特徴として、乾癬、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹という主要な皮膚疾患において生物学的製剤の使用が標準化されてきたことが挙げられる。さらに中等症以上のアトピー性皮膚炎においては、JAK阻害薬による内服治療も行っている。生物学的製剤やJAK阻害内服薬は使用できる施設に制限が設けられているが、当科は使用が許可された施設でもあるうえに、すべてのスタッフが十分なトレーニングを受けているので、地域の医療機関とも積極的に連

携しつつ適切に生物学的製剤や JAK 阻害内服薬の導入および使用を行うことが出来ている。

乾癬の診療には特に重点を置いており、外用療法、内服療法、光線療法（ナローバンド UVB、エキシマライト）、そして生物学的製剤を用いた治療を患者様の症状や重症度、ライフスタイルなどを総合的に検討したうえで選択している。2023 年 3 月時点で 48 例（前年度は 56 例）に対し生物学的製剤を使用中である。

アトピー性皮膚炎の治療の基本は外用療法であり、当科の診療においても外用指導を丁寧に行うことを徹底しており、外用指導を含めた教育入院も行っている。その他の治療選択肢として光線治療や免疫抑制薬の内服治療も行っているが、このような既存治療では効果が不十分である場合には生物学的製剤や JAK 阻害内服薬を用いて治療している。2023 年 3 月時点で 60 例（前年度は 45 例）に対し生物学的製剤を投与中であり、アトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤の使用症例数は年々増加傾向にある。また、JAK 阻害内服薬の使用も徐々に増えつつあり、2023 年 3 月時点で 13 例に使用している。

特発性慢性蕁麻疹に関しては、2022 年 3 月時点で 26 例（前年度は 19 例）に対し生物学的製剤を使用中であり、増加傾向である。

その他の疾患として、当科は円形脱毛症に関しても積極的に診療に取り組んでおり、ステロイドパルス療法、ステロイド局所注射、局所免疫療法（SADBE を使用）、光線療法、内服療法、外用療法などを組み合わせて治療している。基本的な治療方針としては、急性期で広範囲の場合には入院のうえでステロイドパルス療法を行っており、慢性期の難治性で広範囲の脱毛症には局所免疫療法を選択していることが多い。皮膚の良性および悪性腫瘍の治療に関しては、当院形成外科と協力しながら最適な治療を選択するようにしている。保険外診療としては、男性型脱毛症治療、陥入爪に対する金属ワイヤー法を実施している。

入院患者の疾患内訳としては、細菌あるいはウイルス感染症が例年同様もっとも多く、その他には、湿疹・皮膚炎群、薬疹、水疱症、皮膚潰瘍、血管炎、円形脱毛症などが入院の対象疾患となっている。具体的な入院患者数は、帯状疱疹を含むウイルス感染症は 26 例（前年度 25 例）、蜂窩織炎・丹毒などの細菌感染症は 24 例（前年度 38 例）、円形脱毛症は 10 例（前年度 7 例）、水疱症は 6 例、薬疹は 5 例であった。

他職種とのチーム医療については、看護師専門外来であるフットケア外来と連携を図り、皮膚潰瘍や爪囲炎の発症予防に努めている。また、毎週木曜日の午後には皮膚科医師の他に、看護師、理学/作業療法士、管理栄養士、薬剤師、事務職を交えた多職種での院内の褥瘡回診を実施し褥瘡発生率減少と褥瘡予防の啓発に向け活動している（褥瘡回診は、地域および院内の新型コロナウイルス感染状況によっては中止あるいは参加職種を限定して実施していた）。

皮膚科は他の診療科との関わりが多く、さらに処置も多い診療科であるため、他の診療科の医師や、看護師、事務職などを含めたメディカルスタッフとのコミュニケーションを大切にし、円滑な診療のもとで患者様に最適な医療を提供することを常に心掛けている。

（表：2019～2021 年度との比較）

	延外来患者数	初診患者数	紹介患者数	1 日あたり の 在院患者数	新入院患者数
--	--------	-------	-------	----------------------	--------

2019年度	18,160	3,296	517	4.1	150
2020年度	15,634	2,743	415	3.1	105
2021年度	15,301	2,678	480	2.6	90
2022年度	14,846	2,582	479	2.4	78

c. 研究実績

【学会】

- 1 足立英理子、石橋茉実、衣斐菜々、山上優奈、古賀玲子、吉川義頭
広範囲に生じた皮下型サルコイドーシスの1例
第491回 日本皮膚科学会大阪地方会 2022/5/21 (WEB)
- 2 衣斐菜々、千田晃嘉、石橋茉実、山上優奈、古賀玲子、吉川義頭、岡本吉央
本態性血小板血症の治療によって足趾潰瘍が軽快した1例
第475回京滋地方会 2022/6/25 (WEB)
- 3 山上優奈、衣斐菜々、千田晃嘉、古賀玲子、吉川義頭、新美完、小松研一
アメンメビル加療後に出現した帯状疱疹後脳脊髄炎の1例
第115回 近畿皮膚科集談会 2022/7/10 (ハイブリッド開催・大阪)
- 4 衣斐菜々、千田晃嘉、山上優奈、古賀玲子、吉川義頭、磯部葵
乳児疥癬の2例
第477回 京滋地方会 2022/9/17 (ハイブリッド開催・滋賀県)
- 5 千田晃嘉、衣斐菜々、山上優奈、古賀玲子、吉川義頭
当院において dupilumab 投与中に乾癬様皮疹を生じたアトピー性皮膚炎3例の臨床的検討
第73回 日本皮膚科学会中部支部学術大会 2022/10/30 (富山)
- 6 千田晃嘉、衣斐菜々、山上優奈、古賀玲子、吉川義頭
エンホルツマブ ベドチン投与中に多発性に水疱を生じた1例
第494回 日本皮膚科学会大阪地方会 2022/12/10 (WEB)
- 7 千田晃嘉、野村尚史、小亀敏明、中溝聡、米倉慧、神戸直智、吉川義頭、椛島健治
円形脱毛症の病理学的分類によるT細胞のPD-1発現の解析
第52回 日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会 2022/12/16~18 (ハイブリッド開催・愛知)
- 8 千田晃嘉、衣斐菜々、山上優奈、古賀玲子、吉川義頭
結節性紅斑を契機に診断に至ったサルコイドーシスの1例
第479回 京滋地方会 2023/3/4 (ハイブリッド開催・京都府)

【論文】

(症例報告)

- 1 横山恵里奈*、足立英理子、山上優奈、古賀玲子、…、吉川義

Multiple miliary osteomas of the face の 1 例皮膚科の臨床 2022 64 巻 p1551-1555 (査読有り)

- 2 足立英理子*、横山恵里奈、山上優奈、古賀玲子、…、吉川義頭
関節リウマチに対するアダリムマブ投与中に発症した水疱性類天疱瘡の 1 例
臨床皮膚科 2022 76 巻 p905-911 (査読有り)

【研究】

- 1 乾癬における生物学的製剤を基盤とした集学的治療の有用性評価に関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、衣斐菜々)
- 2 円形脱毛症における標準的治療の最適な介入時期とアウトカムに関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、衣斐菜々)
- 3 蕁麻疹の標準的治療と臨床的効果に関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、衣斐菜々)
- 4 アトピー性皮膚炎における標準的治療の有効性の臨床的評価方法に関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、衣斐菜々)